

研究報告

ピアノ初心者の学習進度について

—本学編集のテキストを用いて—

福 井 昭 史

Piano Beginners' Learning Progress –Using texts edited by the University–

Akifumi FUKUI

1 研究の背景

令和6年度の幼児教育学科1年次生を対象とする音楽の実技科目は前期の「保育と音楽表現a」と後期の「保育と音楽表現b」であり、クラスをグループ分けし、①声楽とコード奏法、②ピアノ実技を隔週で行っている。ピアノ実技は各期7回の授業である。回数が少なく授業の間隔があるため、学習の補充を希望する初心者に対しては年間を通して特別の授業を行っている。

授業をするにあたって、クラス分け等の資料とするため学生のピアノ学習経験を調査しており、その結果は〔表1〕のとおりである。令和6年度は学習経験2年以内の初心者が38名(61%)、全くない者が15名(24%)であった。また、経験1年、2年の者の大部分は高校の授業での学習であり、ピアノ教師や市井の音楽教室に通った経験のある者は少数である。一方10年以上の学習経験のある学生は7名(11%)、5年以上は15名(24%)

であり、学生の技能差が顕著であることがわかる。

このような調査結果は今年度に限ったものではなく、この数年間は同様の傾向が続いており、とくにピアノ学習経験の全くない者に限れば、その人数が全学生の半数に及ぶ年度もみられた。

ピアノの授業は、グループ分けによる個人レッスンとしており、一人の教員が1コマ(90分)に2～3名の学生を担当している。

かつては一人の教員が6名程度の学生を担当し、子どもの歌の弾き歌いを目標にしていた。技能差が大きく課題が異なる学生を一人15分程度で指導するというものであった。

現在は、学生の技能差への対応と、1コマでの一人当たりの授業時間の確保の視点から前述のようなシステムとしており、学生のグループ分けにあたっては学習経験の調査結果を考慮している。本年度は、6名の教員がそれぞれ4グループの学生合計10名程度を担当しており、筆者は学習経験の全くない学生11名を担当している。

〔表1〕学生のピアノ学習経験

ピアノ学習経験	人数	%
学習経験なし	15	24
1年	8	13
2年	15	24
3年	8	13
4年	1	2
5年以上	8	13
10年以上	7	11
合計	62	

2 ピアノ学習のテキストについて

授業では、子どもの歌が掲載されている市販の書籍『こどものうた200』（チャイルド本社）をテキストとしているが、ピアノの初心者には難易度が高く、多くの楽曲で演奏が困難であった。そこで、初心者の学習に合うようなテキストを編集することとした。編集にあたっては、教材楽曲は幼稚園や保育園で歌われる子どもの歌を基本とする

こと、初心者が表現力を身に付けることができるようなピアノの学習メソッドであることとした。具体的には、構成音が少ない旋律（ド～ソ）から学習を始め、1オクターブに及ぶ音域の旋律に至るという楽曲の配列と、伴奏をパターン化することである。

ピアノテキストは〔表2〕のような3段階からなる構成である。

段階Ⅰは、5音の旋律（ド～ソ）の楽曲が4曲で、和音はⅠとⅤ（Ⅴ7）である。ピアノ初心者にとっての最初の課題である左手の学習をするにあたって、楽曲ごとに2つの和音を演奏する指の動きに慣れることを目標とする。各々の和音の指使いを示した〔表3〕を示し、指の移動をイメージさせている。右手は手のポジションの移動のない5音（ド～ソ）の旋律とし、右手が1、3、5

の指の音のとき（ド、ミ、ソ）はⅠの和音、2、4の指のとき（レ、ファ）はⅤ（Ⅴ7）の和音であることを意識しながら演奏するよう指導している。

段階Ⅱは、6音の旋律（ド～ラ）の楽曲が6曲で、Ⅳの和音が加わる。右手の音が増えるので、旋律やフレーズに合わせて手のポジションを移動することを学習する。旋律がラの音のときは、Ⅳの和音を基本とすることを意識しながら演奏するよう指導している。

段階Ⅲは、1オクターブに及ぶ旋律の楽曲が12曲で、調、拍子も多彩である。旋律に合わせて右手のポジションを移動させることを学習する。1～5の指をドレミファソの低い音域とファソラシド又はミソラシド（日本の子どもの歌にはファの音を含まない旋律が多い）の高い音域の移動となる。それにあたっては親指が他の指の下を左から

〔表2〕 ピアノテキストの構成（楽曲の配列と特徴）

段 階	曲 番 号	曲名	特徴							その他
			音域		伴奏和音					
			度数	低－高	I	V	V 7	IV	その他	
I	1	ちょうちょう	5	ド－ソ	○	○				
	2	メリーさんの羊	5	ド－ソ	○		○			付点のリズム、ドレミソの4音旋律
	3	ブンブンブン	5	ド－ソ	○	○				
	4	かっこう	5	ド－ソ	○	○	○			3拍子
II	5	きらきら星	6	ド－ラ	○	○	○	○		
	6	チューリップ	6	ド－ラ	○	○	○	○		ファがない旋律
	7	むすんでひらいて	6	ド－ラ	○		○	○		
	8	はと	6	ド－ラ	○		○	○		ファがない旋律
	9	つき	6	ド－ラ	○	○	○			ファがない旋律、付点のリズム
	10	雪	6	ド－ラ	○	○	○	○		付点のリズム
III	11	こぎつね	8	ド－ド	○	○	○	○		
	12	虫の声	8	ド－ド	○	○	○	○		ヨナヌキ音階（シが1回ある）
	13	めだかの学校	8	ド－ド	○		○	○		ヨナヌキ音階
	14	こいのぼり	8	ド－ド	○	○	○	○		ヨナヌキ音階
	15	春の小川	8	ド－ド	○	○	○	○		ヨナヌキ音階（シが1回ある）
	16	とんぼのめがね	8	ド－ド	○	○	○	○		ヨナヌキ音階
	17	どんぐりころころ	8	ド－ド	○	○	○	○		
	18	大きな栗の木の下で	8	ド－ド	○	○	○	○	Ⅲ、Ⅵ	
	19	まつぼっくり	8	ソ－ソ	○		○	○		ヘ長調、ヨナヌキ音階
	20	お正月	8	ソ－ソ	○	○	○	○		ヘ長調、ヨナヌキ音階
	21	思い出のアルバム	9	ド－レ	○	○	○	○		6／8拍子
	22	ミッキーマウスマーチ	6	ソ－ミ	○	○	○	○	多数	ヘ長調
子どもの歌	23	おはようのうた	12	ド－ソ	○	○	○	○		難しい前奏、付点のリズム
		おはようのうた	6	ド－ラ	○	○	○			二長調・ハ長調
		おててをあらいましょう	6	ド－ラ	○		○	○		二長調・ハ長調
		おかたづけ	5	ド－ソ	○		○			ヘ長調・ハ長調

〔表3〕伴奏和音の指使い

和音		階名と指使い							各調のコードネーム			
		シ	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	ハ長調	ヘ長調	ト長調	ニ長調
I	ド・ミ・ソ		5		3		1		C	F	G	D
IV	ド・ファ・ラ		5			2		1	F	B $\flat$	C	G
V	シ・レ・ソ	5		3			1		G	C	D	A
V 7	シ・ファ・ソ	5				2	1		G 7	C 7	D 7	A 7
	レ・ファ・ソ			4		2	1					
指の番号は左右とも、親指（1）、人差指（2）、中指（3）、薬指（4）、小指（5）												

右へ移動する動き、2、3、4の指が親指の上を右から左に移動する動きに慣れることを目標とする。

段階Ⅱまでの楽曲はハ長調を基本とし、ヘ長調の楽譜も掲載している。また、伴奏のパターンは3和音を基本とし、分散和音の伴奏も掲載している。

学習の進捗の目安としては、全くの初心者が前期に段階Ⅱまでの楽曲（10曲）を基本パターンで、演奏できるようになることとする。後期にはさらに段階Ⅲの楽曲を学習することになるが、「21思い出のアルバム」と「22ミッキーマウスマーチ」の2曲は難易度が高いので、「20お正月」までの10曲が演奏できるようになることを目標とする。

なお、学習の進捗によってはパターンの異なる伴奏やヘ長調、ト長調、ニ長調によるものを演奏

し知識や技能の向上を図る構成としている。

ピアノの学習経験が豊富な学生は、本テキストと前述の市販の書籍を併用し表現力の向上を目指している。

3 担当する学生について

本年度の授業で担当した学生11名は、前述のピアノ学習経験の調査では全員が入学前の学習経験がない者である。本学では、入学前の3月にピアノ初心者レッスンを実施しており、その際の学習状況は〔表4〕のとおりである。初心者レッスンに参加した7名の担当教員による評価結果は「A 全くの初心者」が6名、「B 初心者ではあるが両手で何とか弾ける」が1名であった。担当教員の所見によれば、A、Bは「全くの初心者」、C、Hは「楽譜が読めない」、F、Iは「両手で演奏

〔表4〕担当学生の音楽経験

学生	入学前レッスン		その他の音楽活動
A	A	全くの初心者。左手は全く弾けない。	記述なし
B	A	全くの初心者。音部記号を教わり、4小節程度演奏。	記述なし
C	A	楽譜が読めない。	記述なし
D	受講せず		中学、高校の部活でチューバ、ユーフォoniumを演奏
E	受講せず		記述なし
F	A	片手ずつ、止まりながら両手でも演奏。	記述なし
G	受講せず		中学、高校の部活でトランペット、ベース、ドラムを演奏
H	A	楽譜が読めない。	記述なし
I	B	ト音記号は読める、ヘ音記号を習う。「ちょうちょう」を両手で弾けた。	記述なし
J	A	音部記号を知らない。片手ずつで4小節程度演奏。	記述なし
K	受講せず		記述なし

* 入学前レッスン欄のAは「全くの初心者」、Bは「初心者ではあるが両手で何とか弾ける」という担当教員の評価を示す。

できた」などそのレベルもさまざまである。全般的に、楽譜に関する知識に乏しく読譜は苦手のようである。

また〔表4〕には、入学後のアンケート調査に記述された部活などの音楽活動を示している。調査に記述されたこれまでの音楽活動には、D、Gのように中学、高校の部活で吹奏楽部に所属し楽器の演奏経験がある者が2名おり、彼女らは楽譜や音楽表現に慣れていることが予想される。

4 学生個々のピアノ学習の記録と分析

音楽表現の実技科目『保育と音楽表現』は前述のようにグループ分けにより実施しており、学生はピアノの授業を隔週で受講している。この授業には希望者を対象とする初心者クラスの授業を別枠の時間に設定しており、学生は必修授業のない週にこの授業を受けられるようにしている。担当学生のうち、A、B、H、J、Kの5名は、初心者クラスを希望し受講しているが、J、Kは前期までの受講で後期は受講していない。

〔表5〕学生の学習進度の「回」の欄の数字は隔週の必修授業、○印が初心者クラスの授業である。この表は、個々の学生のピアノ学習の進度を授業ごとに最も進んだ楽曲の番号で示したものである。表中の「2Ⅱ」のⅡは伴奏パターン2、「10F」のFはへ長調の楽曲を演奏したことを示している。

学生の学習状況、進度とその分析は以下のとおりである。

- (1)小指を骨折したKを除き、段階Ⅰの4曲は、何れも5月の3回目の授業までに、段階Ⅱの10曲は6月の5回目までに演奏している。初心者にとって初期段階では、伴奏の和音を弾く左手の動きに苦勞しているようである。
- (2)7月の学習は試験に備えての学習となるため、前期の復習となっており、進展はみられない。
- (3)前期『保育と音楽表現a』の授業では、段階Ⅲの「12虫の声」から「14こいのぼり」までの楽曲を学習しており、学生Bは「15春の小川」まで進んでいる。授業の終盤になると学生間の進度に差が生じることが分かる。伴奏パターンの

異なる楽曲やへ長調の楽曲を演奏した学生も数名みられる。

- (4)後期『保育と音楽表現b』の12月までの学習で前述の1名を除き「20お正月」までの楽曲を全てが演奏し、その多くは難易度の高い「21思い出のアルバム」を、また数名が「22ミッキーマウスマーチ」を演奏している。
- (5)初心者クラスを受講し後期まで毎週学習を続けたのが、A、B、Hである。当初は全く弾けない状態であったが、12月現在はテキストのほとんどの楽曲を演奏できるようになった。
- (6)前述の3名のうちBは自宅にピアノがあり日常だけでなく夏期休業中にも学習を続けることができるなど環境に恵まれており、進歩の度合いが目覚ましい。
- (7)Aは寮生、Hは自宅が大学に近いので、日常は大学の練習室で学習できるが、2人とも自宅にピアノが無いため長期の休業中は学習が難しいようである。このような学習環境の違いによって、授業への出席回数が同等のA、B、Hの3名に差が生じたと考えられる。
- (8)中学、高校で吹奏楽の経験のあるDとGは必修授業だけの受講であるが、学習を順調に進めていることが分かる。とくにGは進歩の度合いが目覚ましい。やや欠席の多いDも特段の問題がみられない。
- (9)初心者レッスンで「B初心者ではあるが両手で何とか弾ける」と評価されたIは、必修授業だけの受講であるが順調に学習をすすめており、入学前の技能が学習結果に影響していることが分かる。
- (10)初心者クラスを前期だけ受講したJは、前期までは毎週の授業で順調に学習を進めている。学習意欲はあるものの、遅い時間帯の授業となったため受講できなくなった後期が残念である。
- (11)Kも同様である。前期に小指を骨折したこともあり、その後の授業回数を確保する視点からも後期の未受講が残念である。
- (12)授業は1コマ3名ずつの学生を担当しているが、学習が進行するにつれ個々の進度に差が生じるのが一般的である。しかし、D、E、Fの3名

は進度に大きな差が生じなかったため、意欲や技能の差が目立つことなく学習が進んでいる。

5 指導の結果と今後の課題

学生の学習過程の分析から、ピアノ初心者の学習における課題として次のような事項があげられ、それらを一つ一つ克服する必要があるといえる。

- (1)最も初期の段階では、和音を演奏する左手の指の動きである。初心者の大部分は、主和音（ドミソ）の和音を1、3、5の指で演奏する際、2、4の指が上がり苦勞しているのがみられる。とくに、同じ1、3、5の指で弾き分ける

（ドミソ）と（シレソ）の和音の演奏は、1、2、5の指の（シファソ）（ドファラ）の和音と比較して難易度が高いようである。

- (2)「ちょうちょう」のようなド～ソの5音の旋律は指と鍵盤が1対1で対応しているので容易に演奏できるが、ラが加わる6音の旋律は〔譜例1・きらきら星〕のように指と指の間を広げなくてはならぬ慣れるまでは難しいようである。同じ6音の旋律でも〔譜例2・むすんでひらいて〕はフレーズで指の位置を移動させればよいことから比較的容易に演奏できるようである。
- (3)1オクターブに及ぶ広い音域の旋律の演奏では

〔表5〕学生の学習進度 『保育と音楽表現 a・前期』グループ1とグループ2

月	日		回	A	B	C	D	E	F
	必	選							
4	15		1	1	1	2	2	2	
		23	○						
5		7	○	3	4				
	13		2	4	6	4		4	4
		21	○	4	2 II				
	27		3	6	10 II	7		7	7
6		4	○	7	10 F				
	10		4	10	12	11	10	10	10
		18	○	11	12				
	24		5	12	14	12	12	12	12
7		2	○		15				
	8		6	7	6				11
		16	○						
		23	○						
8		29		6	7	11			
	5		8	試験					

月	日		回	G	H	I	J	K
	必	選						
4	8		1	1	1	2	1	1
		16	○					
	22		2	4 II	4	4 II	4	3
5		7	○		5		4	
		14	○		5			
	20		3	8	7	8	8	4
		28	○		2 II		2 II	
6	3		4	4 F	9		10	6
		11	○		11			
	17		5	13	13	13	12	6
		25	○		14		14	
7	1		6	14	14	14	14	9
		9	○					
		16	○					
	22		7	13	13	12	7	3
8		30	○					
	5		8	試験				

『保育と音楽表現 b・後期』グループ1

10		1	○	14	15			
	5		1				14	14
		8	○					
		15	○		17			
	21		2	15	21	14	17	17
11		29	○	18	21			
	9		3	19	22	17		18
		12	○		22			
	18		4	20	23	23	20	20
12		26	○					
	2		5	23	21	23	21	21
		24	○	18	22			

『保育と音楽表現 b・後期』グループ2

9	30		1	20	15	19	15	10
10	7		2	21	17	21	17	10
		15	○		18			
		22	○					
11	28		3	22	21	22	18	11
		5	○		21			
	11		4	23	21	23	23	12
		19	○					
12	25		5	23	21	23	23	
		3	○		20			
	23		6	23	23		23	8

手のポジションの移動が必要となる。〔譜例3・こぎつね〕はド〜ソとファ〜ドの移動をソの音の連打とフレーズの切れ目で行うので比較的容易である。また〔譜例4・虫の声〕は旋律の大部分が個々の指に対応するミソラシドによることからこれも比較的容易である。一方〔譜例5・めだかの学校〕のように親指が他の指の下を移動するのは難易度が高いようである。

ピアノ初心者の技能向上には以上の課題を丁寧に指導すること、とくに手のポジションが移動する際の適切な指使いによる学習を促すことが大切であるといえる。

テキストの教材に用いた「子どもの歌」の大部分は2拍子と4拍子であることから、3拍子や6拍子のリズムの楽曲の学習が課題である。

テキストでは、どの楽曲もハ長調の学習から始めることを基本としている。そのことで演奏できる楽曲数を増やすことができ学習意欲を高めているようである。また、ハ長調で演奏できる楽曲は、移調しても容易に演奏できることから、ハ長調の学習を基本とする方法は有効であるといえる。

〔譜例1・きらきら星〕

〔譜例2・むすんでひらいて〕

10

〔譜例3・こぎつね〕

〔譜例4・虫の声〕

〔譜例5・めだかの学校〕

7

※譜例の指使いの○印は、手の位置が移動する等の演奏の際に注意を要する箇所。